令和６年 10 月１日（毎月１回１日）発行　　昭和 43 年１月 10 日第３種郵便物認可

みちしるべ

MICHISHIRUBE

みちしるべ

Issue of October 2024
MICHISHIRUBE No.911

Contents

○○の秋／四谷　証 3

天国のドレスコード／小林　実 4

著名人と聖書
第 16 回　村岡花子／古賀敬太 8

すべてのものを創造された方／越田吉範 12

☆当月号および過去 1 年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。　https://e-michishirube.com

表紙写真：鳥海山からの朝景（山形県酒田市）

○○の秋

四谷　証（あきら）

皆さんは、○○の秋と聞いて、何を連想されるでしょうか。

食欲の秋…秋は収穫の時期です。おいしい食べ物は、私たちの体や心を豊かにしてくれます。

スポーツの秋…10月にはスポーツの日があります。運動も私たちの体や心を豊かにしてくれます。

芸術の秋…秋は自然が色づき、展覧会などが行われます。絵画や音楽などに触れることによっても私たちの心は豊かになります。

私たちは、色々なことを通して体や心を養います。しかし私たちが大切にしなければいけないものがもう一つあります。それは、霊です。体や心が満たされているはずなのに、何かが足りないと感じたら、それは私たちの霊が満たされていないからです。

では霊を豊かにするためにはどうすれば良いのでしょうか。

読書の秋…10月には読書の日もあり、読書週間が始まります。秋は過ごしやすい季節なので、ゆっくり読書ができます。

世の中にはたくさんの本がありますが、どの本を読めば良いのでしょうか。世界で一番多く読まれている本は聖書ですから、聖書は読む価値があると言えるでしょう。

実は、聖書は神様が私たちのために、人を通して書いた書物です。ですから聖書を読むと神様のことが分かります。そして本当の神様だけが、私たちの霊を満たすことができるのです。

この秋は体や心だけではなく、聖書を通してご自分の霊も豊かにお過ごしください。

「あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、…保たれていますように。」

（テサロニケ人への手紙第一・5章23節）

天国のドレスコード

小林　実

今年４月、二人の閨秀が帰らぬ人となりました。桂由美さん、そしてフジコ・ヘミングさん。共に１９３０年代生まれ、戦前から戦後へ、新時代の揺籃期という蛹に育まれながら、その芸術スタイルは好対照を為しています。

一方は、ウエディングドレスで挙式に千紫万紅の瑞々しい花彩を降らせたデザイナー。「お嫁さんが自分の妹だと思ってやっている。一生に一度だから失敗は許されない」と一切の妥協を排除する完璧主義の桂由美さん。

他方、聴力を失いながらも太い指先が叩き出す入魂のピアノ演奏で音符に血流を注いだピアニスト。「間違えたっていいじゃない、機械じゃないんだから」と五線紙という殻を脱ぎ捨てて素材を顕在させた遅咲きの異才フジコ・ヘミングさん。還暦を経て脚光を浴びたステージで、袖を通したのは、名指揮者レナード・バーンスタインとの共演で飾るはずだった華やかなドレスではなく、ようやく辿り着いた「身丈に合った衣裳」でした。

「失敗は許されない」と「間違えたっていいじゃない」。対極を為す双璧の主張。失敗と同居している私は、ヘミングさんの言葉に親近感を覚えますが、皆さんはいかがでしょうか。

さて、桂由美さんが目指していた「究極のドレス」ということでは、イエス様がこのように語られたことばを思い出します。

「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。今日あっても明日は炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、もっと良くしてくださらないでしょうか。信仰の薄い人たちよ。」（マタイの福音書6章29、30）

ソロモンは、紀元前960年頃のイスラエルの王、歴史上同国が最も栄えた時代に統治した人物です。

「王様なのに草花にも劣る服を纏（まと）っていたのか、随分質素で清貧な人」とは早合点、その逆です。歴代随一の華美な盛装をした王の代表として、イエス様は彼を取り上げたのです。そしてそれでもその装いは野の草にさえ及ばない、と。私たちは自分の審美眼を改めねばなりませんね。

そう、野原に目を転じてみましょう。自然は発見の宝庫です。今年は初めてセリバオウレンを肉眼で捉えました。その小ささ、花弁の形状、色彩、芳香に「ああ、神の指の業だ！」と感動しました。

セリバオウレン

極小で見付けるのが困難な故に感激も一入だったのです。どのように煌びやかな衣装も、神様が造られた一凛の花には及びません。

考えてみれば、日々の散歩道にも「神の作品」はあふれています。観賞に耐えない燃料用の野花であっても、「神様が装ったもの」。結局人間が紡ぎ出したものは、神の作品には及ばないのです。

またフジコ・ヘミングさんの「間違ってもいい」という姿勢については、聖書の有名な「放蕩息子」の例え話を思い起こさせます。

途中からの引用ですが、次のように記されています。

「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。息子は父に言った。『お父さん、私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう』」（ルカの福音書15章20～23節）

父親のもとを飛び出して弊衣蓬髪で帰ってきた弟息子。「故郷に錦を飾る」、そんな淡い夢を描いていたかもしれない息子でしたが、現実は夢も希望も破れて帰ってきました。彼は明らかな失敗者でした。そのような彼を包んだのは、父の熱い抱擁と、そしてその父が用意してくれた「一

番良い衣」でした。

聖書には、神様が、失敗だらけの私たちにもっとも素晴らしい衣を着せてくださることが記されています。

「主が私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」

（イザヤ書61章10節）

天国に入るには、この、神様が準備してくださった義の衣が必要です。いかなる善行も、天国に迎えられるドレスコードとはならないのです。それは、自分の罪を悔い改めて、イエス様を救い主と信じることによって与えられます。さらにありがたいことに、この衣裳代はすでに「支払い済」です。十字架で流された血の代価がそれなのです。

ぜひ、野に咲く花にも究極の美を与え、どんな罪人にも赦しを与えてくださる神様の愛を知り、天国に入るための衣裳を纏う方となってください。

著名人と聖書（第16回）

古賀敬太

村岡花子（1893―1968）

―花子を絶望から救った聖書のことば―

皆さんは、2014年の上半期に放映されたNHKの朝の連続ドラマ「花子とアン」をご覧になったことがあるでしょうか。そのヒロインのモデルとなったのが村岡花子で、「赤毛のアン」シリーズなどの翻訳者や児童文学者として良く知られています。

今回は、村岡花子と聖書の関係に光を当てて、彼女の人生の一齣（ひとこま）に迫ってみたいと思います。その際に村岡花子の孫にあたる村岡恵理著『アンのゆりかご―村岡花子の生涯』（新潮文庫）から引用します。連続ドラマは、この書物を原案として作られました。

村岡花子と東洋英和女学校

村岡花子は、1893年に父・安中逸平、母・てつの長女として山梨県甲府市に生まれます。父は熱心なクリスチャンで、花子に将来を期待し、1903年にカナダ・メソジストのミッション・スクールである東洋英和女学校に入学させます。花子は、1912年卒業するまで、約10年間この学校で学び、ミルトンの『失楽園』、テニスンの『イン・メモリアム』、ストウ夫人の『アンクルトムの小屋』、バニヤンの『天路歴程』、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』、オルコットの『若草物語』、モンゴメリーの『赤毛のアン』を原書で読破した多感な女学生でした。

花子の信仰の状態

ところで東洋英和女学校の宣教師たちは女学生に聖書の大切さを教えていましたが、花子はどのような信仰を持っていたのでしょうか。

この学校に、柳原伯爵の令嬢・燁子（あきこ）（筆名「白蓮」）が一時期学ぶようになり、花子も親しくなります。燁子は、柳原伯爵と芸者の子で、16歳で結婚し、子供を生みますが、20歳の時に離婚します。そのような暗い過去があり、罪責感を感じていた燁子は、校長のミス・ブラックモアに胸の内を告白します。その時ミス・ブラックモアは、燁子に、「神の御子イエス・キリストがすべての人の罪を負って、十字架にかかったことを信じれば、罪はすべて赦される」と励まします。

花子自身は、聖書を学んでいましたが、神の存在やイエス・キリストの十字架の贖（あがな）いを信じることができず、神を畏れる気持ちもありませんでした。花子は、燁子に、「私、神様が本当に存在するのかということだって疑っているのよ。―聖書の中には、いっぱいわからないことがあるわ。それに先生たちは、『神を畏れて人を畏れず』というけれど、本当は神も人をも畏れずに、誰かを犠牲にしても貫きたい愛があるということが、いちばん素敵だと思うわ。」と語っています。後に花子は、この言葉を自ら実践することになります。

村岡儆三との結婚

花子は１９１３年、20歳で東洋英和女学校の高等科を卒業しました。卒業論文は、テニソンの「イン・メモリアム」で、「古き制度は変わりゆく、新しきものに場所を譲りつつ」が彼女の座右の銘でした。彼女は新しい時代の女性で、古い習慣にとらわれることを嫌いました。

花子は卒業して山梨英和女学校で教師として務めた後、東京の築地にあったキリスト教出版社の編集者となり、そこで福音印刷会社を経営していた村岡儆三と大恋愛をし、１９１９年10月に結婚しています。しかし、この結婚は他者を犠牲にしての結婚でした。まず儆三には、子供を生んで、当時死病であ

ると言われた結核を発病し、実家に帰っていた妻がいました。また生まれた子供を、兄夫婦に預けたままにして、一人暮らしをしていました。二人の結婚の陰には、儆三の妻とその息子の涙と悲しみがありました。

花子は儆三との幸せな結婚生活を喜びつつも、心の奥深くでは罪責感を感じて生きていました。そのことが露わにされる大事件が生じます。

○関東大震災

１９２３年に関東大震災が起こり、儆三の経営する印刷会社も瓦礫の山となり、70名の職工が建物の下敷きになるという悲劇が起きます。またこの時、先妻の間にできていた息子も死んでしまいます。この一連の出来事は、儆三と花子の心を蝕んでいきます。

○実の子の死

儆三と花子の間には、道雄という男の子も生まれましたが、赤痢が原因で、１９２６年９月１日に満６歳で病死します。葬儀で、「すべては神のみこころだ」と聞かされた時、花子は心の中で反発します。

「神のみこころであるならば、なぜ罪のない幼いのちが断ち切られなければならないのか、なぜ血を流さんばかりの祈りが聞き入れられなかったのか、神よ、我はかかる痛手に耐えうる勇者にあらず、離れ去りたまえ。

花子は、告別式の間、教会の最前列で自分の腕から道雄を奪った神を畏れながらも呪っていた。みこころなんかではない。病気の妻と幼い子供を離れた敬三と、彼らから敬三を奪った花子に対する制裁、二人が結ばれた罪の代償なのだ。それは与えて奪う、あまりにもむごたらしい仕打ち。これから先の生涯、二人が犯した罪の償いとして、この悲しみを背負って生きろと命じられたのであろうか。ひとり息子を失った花子は立ち上がる 気力をなくし、悲嘆に打ちのめされ、ただ虚無の中に泣き暮らすだけであった。」

花子は、道雄の死を「そのひとりあれば、まひるのかがやき、そのひとりあらずば、ぬばたまの『黒い』闇、いみじくも貴きその一人よ、そのひとり子、いまは世になし。」と追悼しています。

しかし儆三との結婚に罪責感を感じていた花子にとって、道雄の死はさばきであると思われ、その心

は打ち震えるのです。花子にとって、神は愛の神ではなく、さばきの神でした。

花子の回心―神の愛を知る

しかし、花子が絶望の底に沈んでいた時に、次の聖書のことばが花子の胸に強く迫ってきました。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネの福音書3章16節）

花子はこのことばを通して、神の無限の犠牲の愛に触れます。彼女は道雄を失った悲しみの深さを知っていただけに、ひとり子イエスを十字架で犠牲にされた父なる神の断腸の思いを肌で感じることができました。と同時に、自分の罪のために愛するひとり子を犠牲にされた、神の愛の大きさと深さに触れ、苦難から立ち上がる勇気を与えられるのです。

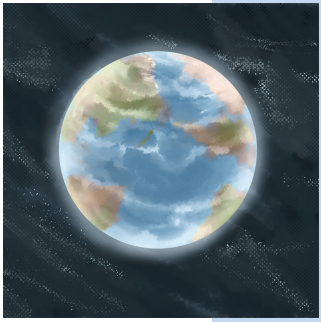
花子の天職

花子は、道雄の死を通して、神の愛に目覚めると同様に、自らの使命を自覚します。彼女は、「神が定めた運命に従おう。自分の子は失ったけれど、日本中の子どもたちのために上質の家庭小説を翻訳しよう。」と決意し、手始めにカナダ人宣教師ミス・ショーから譲り受けたモンゴメリー著『Anne of Green Gables（原題・緑の切妻屋根のアン）』を敵性言語であるにもかかわらず、戦争中に翻訳し、『赤毛のアン』という邦題をつけて、戦後の１９５２年に出版します。

そしてその後、立て続けにアンシリーズの10巻などを翻訳・出版し、子供たちに想像力、共感する力、愛の絆の大切さを訴えていきます。その底流に流れているものは、神の愛でした。

すべてのものを創造された方

越田吉範



聖書の一番はじめの書、「創世記」の1章に、神様が六日間で天地万物を造られたことが書かれてあります。このことは神話のように思っている方もおられると思いますが、クリスチャンはすべて事実であると信じています。この秩序正しくできている世界が偶然に出来上がったと考えるよりも、それを造られた存在があると考える方が、はるかに理にかなっているからです。

そしてすべてのものを創造された方は、同時にご自身が造られたものを思いどおりに扱うことのできる方でもあります。そのことを、聖書は、様々な箇所をとおして証しています。そこで、今回、創世記1章に記されている天地創造のそれぞれの日にちと、聖書に記されてあるさまざまな出来事とを組み合わせて、そのことを考えてみます。

○第一日目

「神は、仰せられた。『光、あれ。』すると光をあった。・・神は光と闇を分けられた。」（3、4節）

神様は、ご自身が光であり、そして光を輝かせ、

闇と分けられる方です。
ですからモーセの時代、エジプト全土を三日間も真っ暗闇にし、反対にイスラエルの民がいる所には光を照らすことがおできになりました。（出エジプト記10章参照）

○第二日目
「神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。」（7節）
神様は、水を創造された方です。
ですからノアの時代に、大洪水を起こし、水をみなぎらせて、天の下にある高い山々をおおわせることがおできになりました。（創世記7章参照）

○第三日目
「地に植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに生じさせた。」（12節）
神様は、すべての植物を創造された方です。
ですから預言者ヨナのために唐胡麻を生えさせて彼の頭の上の陰にすること、逆にそれを枯らすこともおできになりました。（ヨナ書4章参照）

○第四日目
「神は仰せられた。『光る物が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。』」（14節）
神様は、太陽や月と星を創造し、その運行を保っておられる方です。
ですから、ヨシュアの時代、太陽を丸一日沈まないようにされました。（ヨシュア記10章）
またヒゼキヤ王が病気になった時、日時計の影を十度後に戻すことがおできになりました。（列王記第二・20章）
―ただ、これらの事象は、太陽を動かされたわけではなく、地球の自転を調整されたと思われますが。

○第五日目
「神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を

種類ごとに創造された。」（21節）

神様は、魚や鳥を創造された方です。

ですから大きな魚に、前述のヨナを飲み込ませ、三日三晩経った後、魚に命じてヨナを陸地に吐き出させることがおできになりました。（ヨナ書1～2章参照）

また烏（からす）に、預言者エリヤを養うように命じ、朝と夜にエリヤのところにパンと肉を運ばせることもおできになりました。（列王記第一・17章参照）

○第六日目

「神は、地の獣を種類ごとに、家畜を種類ごとに、地面を這うすべてのものを種類ごとに造られた。」（25節）

神様は、すべての動物を造られた方です。

ですから獅子の穴へ投げ込まれた預言者ダニエルに対し、獅子の口をふさいで何の危害を加えないようにすることがおできになりました。（ダニエル書6章参照）

「神は人をご自身のかたちとして創造された。」（27節）

神様は、最後に人間をも創造された方です。

ですから、神様は当然、人のこともご自身の思いどおりに扱うことがおできになります。しかし、人間を何でも神様の言うことを聞くロボットのようにはお造りにならず、人の思いを尊重し、自由意志をお与えになってくださいました。

ただ残念なことに最初の人、アダムとエバは蛇（悪魔）の惑わしに負け、神様のことばに従わない選択＝罪を犯してしまいました。その結果、自分たちが裸であることを知り、神様の御顔を避け、身を隠すようになります。（創世記3章参照）

●

すべてのものを創造された神様は、あなたも形造られた方です。あなたにも自由意志をお与えになってくださっています。

あなたはアダムとエバのように神様のことばに従わない選択＝罪を犯し、あなたをお造りになってく

ださった方から離れた生活をしていませんか？

神様は、罪を見逃すことができません。しかし同時に愛の豊かな方でもありますので、今から2千年前、ご自身の御子を天からお遣わしになり、あなたの罪をこの方に負わせ、十字架の上で身代わりとしてさばいて下さいました。

かつて、アダムとエバのために、動物を殺して皮の衣を作り、彼らに着せて覆って下さった神様は、（創世記3章21節）今は、ご自身の御子イエス・キリストを信じる者の罪を赦し、罪を覆い、救って下さろうとしています。

ですからあなたが、強制的にではなく、あなたの意志でイエス・キリストを信じて救われ、神様に感謝・賛美をささげる者となることを望んでおられるのです。

「知れ。主こそ神。主が　私たちを造られた。私たちは主のもの　主の民　その牧場の羊。…主に感謝し　御名をほめたたえよ。」

（詩篇100篇3、4節）

みちしるべ10月号　第911号

令和6年10月1日（毎月1回1日）発行

発行所　伝道出版社
〒183-0056　東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790

編集人　伝道出版社　編集部
https://dendoshuppan.shop-pro.jp/

印刷所　株式会社　共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可
令和6年10月1日（毎月1回1日）発行
みちしるべ10月号　第911号
伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9
定価1部 50円＋税　送料63円
振替00140-9-27336

Column

お子さま連れ車両

ある新幹線には「お子さま連れ車両」があります。この車両は小学生以下の子連れ利用者向けの車両で、子ども連れでも快適に新幹線を利用できます。2010年から始まり、今年も大型連休や夏休みシーズンに運行しています。日本社会では、子ども向けの様々な制度やサービスが整備されてきており、子どもが尊重されつつある社会だと感じます。

しかしイエス・キリストの時代は、今ほど子どもたちは尊重されていなかったようです。人々が小さな子どもたちをイエスのもとに連れて来たとき、子どもにかまっている暇はないと考えたのか、弟子たちは彼らを叱りました。その様子を見たイエスは、次のように言われました。

「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」

（マルコの福音書10章14節）

皆さまは、自分が尊重されていないと感じるような経験をお持ちかもしれません。しかし、イエスは子どもたちを喜んで迎えられただけでなく、どのような貧しい境遇や弱い立場にある人々も、拒むことなく受け入れられました。そしてご自分のいのちを犠牲にするほどに、あなたをも愛された方なのです。

（沖山祐喜）

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。